

年頭所感

日本小児科学会 会長 高橋 孝雄



新年あけましておめでとうございます。

本年も引き続き取り組んでいくべき多くの重要課題の中で、小児科医育成のための制度改革と国際舞台でのプレゼンス向上が、ともに「好機到来」という観点から節目を迎えていると感じております。また、これら2つの課題、すなわち卒後教育と国際貢献は、密接に関連し合っていると思います。

医師の育成・生涯教育が、すべての学会にとって、その将来を左右する最重要課題であることは言うまでもありません。年齢、経験を問わず、すべての医師は、良い環境・良い指導者による優れた教育を受ける権利を有しています。一方、すべての医師は、教えることを通じて医学・医療の進歩に貢献する義務も有しています。このような権利と義務のバランスを最適化しつつ、小児科医の職場環境・就労条件を改善し、結果として小児医療提供体制の整備を進めることが、学会の大きなミッションと考えます。

社会に求められ、信頼される小児科医を育てるには、単に達成目標（カリキュラム）を提示するに留まらず、どこで、だれと、どのような経験を積むかの道筋（プログラム）を示し、目標に向かって若手とベテランが共に研鑽を積むことが重要です。そのような観点から、日本小児科学会が他の学会に先駆け、平成29年度からプログラム制による専門医制度（暫定制度）をスタートさせたことは大きな舵取りとなったと考えております。研修環境、就労環境の改善、小児医療提供体制の整備を推進するための好機到来と思えます。

高度、安全な医療をすべての子どもたちに提供することは、発展途上国においても重要課題ですが、先進国以上にその実現は困難であります。発展途上国における医学教育・医師育成制度の充実、小児医療先進国である我が国にとって、実現可能性の高い国際貢献のひとつです。例えば、小児科専門医育成カリキュラムの英語化・普及などはすぐにも取り組める事業だと思います。本学会は、Global Pediatric Education Consortium (GPEC) など医学教育に関わる国際活動を人的、経済的に支援することにより、この分野で少なからず実績を上げてまいりました。

国際小児科学会会長に Bhutta 先生が選任され、今後、活動の方向転換、さらなる活性化が起こると予想します。そのような折、廣瀬伸一理事（国際渉外委員会担当）が国際小児科学会執行役員に選任され、その運営において重責を担われることになりました。本学会が国際舞台でのプレゼンスをさらに高め、相応の国際貢献をしていくための好機到来と思えます。

好機を逃さず、本年も会員の皆様と共に邁進して参りたいと思います。どうぞ宜しくお願い致します。